

弘前劇場公演 作・演出／長谷川孝治

弘前劇場公演『冬の入口』

〈協賛〉アサヒビール株式会社 トヨタ自動車株式会社 株式会社資生堂

〈後援〉浪岡町

〈助成〉文化庁  Arts Plan 21

〈キャスト〉福士賢治 畑澤聖悟 後藤伸也 永井浩仁 佐藤誠 山田竜大 中島剛

佐藤てるみ 藤本一喜 杉原文子 大作綾 濱野有希 佐藤友美

長谷川等(客演・浪岡演劇研究会) なかじょうのぶ(客演) 伊藤哲哉(客演)

〈スタッフ〉舞台監督／野村眞仁 音響／原島正治(囃組) 照明／中村昭一郎 装置／鈴木徳人

弘前劇場公演『冬の入口』

■公演日程

〈浪岡公開ゲネプロ〉青森県舞台芸術活性化事業関連企画

2000年10月22日[日] 13:00〜 *入場無料

浪岡町中世の館

038-1311 青森県南津軽郡浪岡町浪岡43 0172.62.1020
*15:00より、シンポジウム「地域演劇の可能性」を同会場にて開催〈東京公演〉第14回青山演劇フェスティバル 漂流演劇2000参加
TIF企画公演 / 東京国際舞台芸術フェスティバル2000リージョナルシアター・シリーズ

2000年10月27日[金]〜29日[日]

青山円形劇場

150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-1 03.3797.5678

〈伊丹公演〉AI・HALL リージョナルシアター

2000年11月4日[土]・5日[日]

AI・HALL

664-0846 兵庫県伊丹市伊丹2-4-1 0727.82.2000

〈弘前公演〉

2000年11月9日[木]〜11日[土]

スタジオ・デネガ

036-8013 青森県弘前市上瓦町11-2 0172.32.1794

〈北九州公演〉シアタープロジェクト2003

2001年1月20日[土]・21日[日]

ラフォーレミュージアム小倉

803-0814 福岡県北九州市小倉北区浅野2-14-5

■チケット料金／全席自由

一般前売 2,800円[当日 3,000円]

学生前売 2,000円[当日 2,500円]

高校生以下 1,500円[前売・当日共]

■チケット取扱

全公演一般券・学生券は弘前劇場でも取扱致します。

〈東京公演〉9月3日発売開始 *日時指定・整理番号付き

青山劇場予約センター 03.3797.1400

チケットぴあ 03.5237.9988

e+ (http://eee.eplus.co.jp) 03.5479.9911

チケット24 03.5489.2229 (アクセスNo.2742#)

東京国際舞台芸術フェスティバル 03.5428.0335 (問合せのみ)

〈伊丹公演〉9月10日発売開始

チケットぴあ 06.6363.9999

AI HALL 0727.82.2000

〈弘前公演〉9月23日発売開始

弘前市内各プレイガイド

〈北九州公演〉

シアタープロジェクト2003事務局 093.562.8435

■お問合わせ

弘前劇場 Tel・Fax.0172.62.0717 (時間外090.3124.0339)

http://www.hirogeki.co.jp/ office@hirogeki.co.jp

東京公演 10.27 10.28 10.29

14:00〜

★

★

19:00〜

★

★

受付60分前・開場30分前

伊丹公演 11.4 11.5

14:00〜

★

19:00〜

★

受付60分前・開場30分前

弘前公演 11.9 11.10 11.11

15:00〜

★

19:30〜

★

★

受付45分前・開場30分前

北九州公演 1.20 1.21

14:00〜

★

19:00〜

★

受付60分前・開場30分前



子どもの国

11月の初め、空が高くなって大気がしまってくる。夏の間、小学校2年の息子は、小学校5年の娘にいいようにオモチャにされていた。「コーラ買ってきて」「お風呂の掃除をして」「ちょっと50円貸しなさい」「遊びに行くよ」…ハタで聞いているとまるで脅迫と恐喝だが、息子は息子で結構使役されることを楽しんでいるみたいだった。なにしろ自分で決断しなくてもいいのだ。姉に従ってさえいれば決断する手間が省ける。

しかし、夏が終わって秋が過ぎ、雲の形が変わってしまふと息子は急に無口になった。そして、姉のいいつけに反抗するようになった。

奇跡的な小春日和の日曜日、昼近くに起きて階下へ降りると息子が一人で本を読んでいる。「母さんとおねえは?」「買い物」「おまえは行かないのか」「うん」「昼飯は?」「まだ」母親からの電話が鳴る「昼どっかで食べて、私たちが買い物ついでに食べるから」「なんでシローがひとりなんだ?」「おねえとちょっとね」「わかった」遠くで飛行機の音がする。ブーンという音のブトンの間にものすごく時間がかかった。

歯を磨いて、髭を剃って、顔を洗って、居間に戻ったら息子はまだ本を読んでいた。猫が息子の足元で欠伸をし、私は息子をぼんやり眺めながらタバコを1本吸った。何かが変わった。ボタンを掛け間違えたときのように、居間が奇妙にねじれているのだ。ゆっくり時間をかけて室内を見回す、何も変わっていない。しかし、居心地が悪い、もう一度見直す、やはり何も変わっていない。ま、いいかとタバコを消して息子に言う「メシ、食いに行くか」「うん」といって息子が立ち上がる。そのときに気が付いた。息子は本を置き、組んでいた足をほどいて立ち上がったのだ。いつからコイツは足を組むようになったんだらう。普通、子どもは足を組まない。私も子どもの頃は足を組んだことはなかった。

ジャンパーを羽織って外に出て「なに食う?」「焼きそば」なかなかいい提案だった。昼にビールと焼きそばは不滅のコンビである。私が住んでいる町には有名な焼きそば屋がある。味は賛否両論で、あれは焼いているのではなくソースをまぶしているだけだと言い張る者や、たまに食べなくなつて40分かけて車で買ってくるという者もある。要するに、町で生まれて育った小学生は必ず通過儀礼のようにしてその焼きそばを食べることになっているのだ。「私、お米嫌いな」という日本人をあまり見かけないように、私たちこの町で育った子ども達は別に文句も言わずにそこの焼きそばを食し続けている訳だ。メニューは400円から200円まで5種類の焼きそばとおでんだけ。泣きたくなるぐらいシンプルなメニューなのだ。「ええと、400円の焼きそば、野菜はいいです。それから卵を入れた200円のおでんを下さい」息子の顔をまじまじと見ていた。400円の焼きそばというのは洗面器にいったいぐらいの量がある。それを食べようというのかコイツは。「川で食おう」自分用に250円の焼きそばを買い、向かいの酒屋さんでビールのロング缶を1本とコーラを求めてすぐそばの川へ行つた。

護岸工事された川の土手で、息子はあぐらをかいて黙々と焼きそばを食った。私はビールを飲みながら黙ってそれを見ていた。川面を通過してくる風には冬が潜み、名前は知らない背の高い木がざわざわと揺れ、向かいの墓地の卒塔婆もカラカラと鳴った。息子は3分の2くらいを一気に食べ、大きく深呼吸してからコーラを飲んだ。そしてまた続きを食べた。息子は何も言わず、私も何も言わなかった。遠くからまた飛行機の音が聞こえてきた。